

大成洞 88 号墳出土 螺鈿類似遺物の復元試案

著者	李 宣周, 大谷 育恵(訳)
著者別表示	LEE Seon-ju, OTANI Ikue [trans.]
雑誌名	金大考古
号	78
ページ	98-100
発行年	2020-06-30
URL	http://doi.org/10.24517/00059491



大成洞 88 号墳出土 螺鈿類似遺物の復元試案

イソソジュ
李宣周（韓国伝統文化大学校）
（大谷育恵 訳）

I. はじめに

大成洞 88 号墳の発掘調査からは、漆塗膜片と共に極めて精密な加工品が密集した形で北側短壁付近の 2 地点（写真 1: 赤丸内）で発見された。腐食度がひどく、遺物の形態と性格が不明瞭であったため、発掘時に遺物の回収が困難な状態であった。現時点では遺物の性格と性質を正確に把握することはできない状態である。

II. 遺物観察と類例

出土当時の写真を詳細に観察すると、写真 1 の左側上部分と中央下部分に赤い円で表示した表示の中に白い点が現れているのが見える。写真 2 は写真 1 の中央下部分を拡大したもので、その大きさは 1～1.5mm の隅丸四角形で、太い X 字形をしている。

このように白色を帯びた精密に加工された遺物の事例として、中国の 5 世紀前半の北燕馮素弗墓（1 号墓）（415 年）から出土した嵌骨長方漆盒を挙げることができる [遼寧省博物館 2015]。報告書に基づく図 1 は、漆塗りした蓋の表面に横 0.5mm、縦 1cm の菱形に骨を加工したものを並べ嵌め込んだもので、表面は白色を帯びている。また、時代が下るが、写真 3 のとおり中国浙江省湖州市の飛英塔で出土した経函漆片に類似する文様を見ることができる [中国漆器全集編集委員会 1990]。写真にみられるように、楽器を奏でる飛天文様の上部に X 字形に切った螺鈿片が横方向に配列されているのを確認することができる。

III. 螺鈿の復元

一般的に精密に加工された形で木函の表面を装飾するのに使用される材料として、石、骨、貝（螺）を挙げることができる。この中で石と骨は固く、薄

く加工するには無理がある。それに対して貝は薄くて嵌入しやすく、極細密に加工することも可能である。大成洞 88 号墳の四角形で太い X 字形出土物は約 1mm の小さなサイズであるにも関わらず、薄く精密に加工されている。また時代は下るものの、螺鈿による類似する事例も確認することができる。このような点を考えると、硬質の骨ではなく加工しやすい貝を加工した可能性が高いと推測される。

したがって、本稿では大成洞 88 号墳出土の極精密遺物を中国でみられるような形の事例を基に、螺鈿で作られたものであると推定して復元製作することにした。

まず文様が分かるように貝の上に文様を描いたのち、貝を実物より大きい 1.5～2mm サイズの四角に切った（写真 4 左）。四角形の貝を削り、各面の内にくぼんだ部分を先に作った後、各角部分を丸く加工し、全 60 個を完成させた（写真 4 中、右）。最後に遺物写真と比較しながら、写真のように配置して再現した（写真 5）。

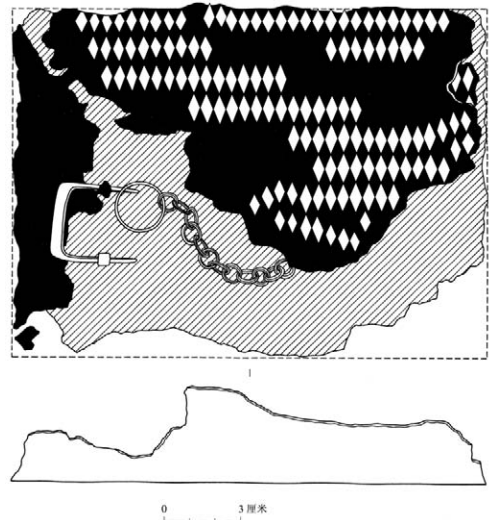


図 1 北燕馮素弗墓出土 嵌骨長方漆盒



写真 1 遺物出土状況



写真 2 中央および部分拡大



写真 3 中国浙江省湖州市の飛英塔出土経函（五代）

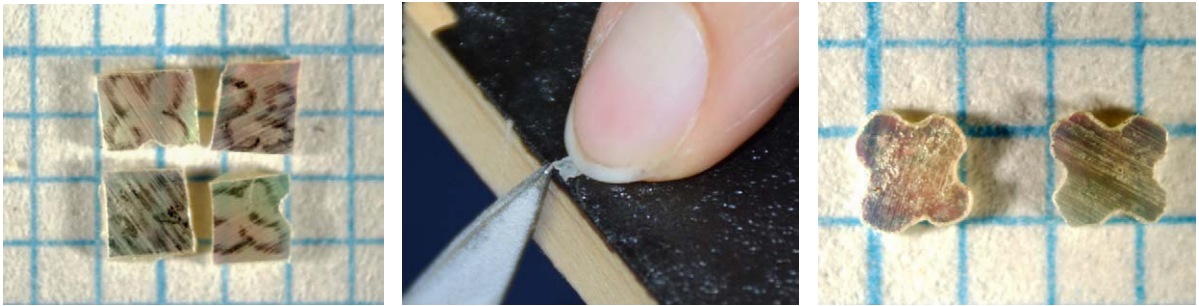


写真 4 螺鈿加工（左：貝を四角に切る 中：辺を削る 右：完成）

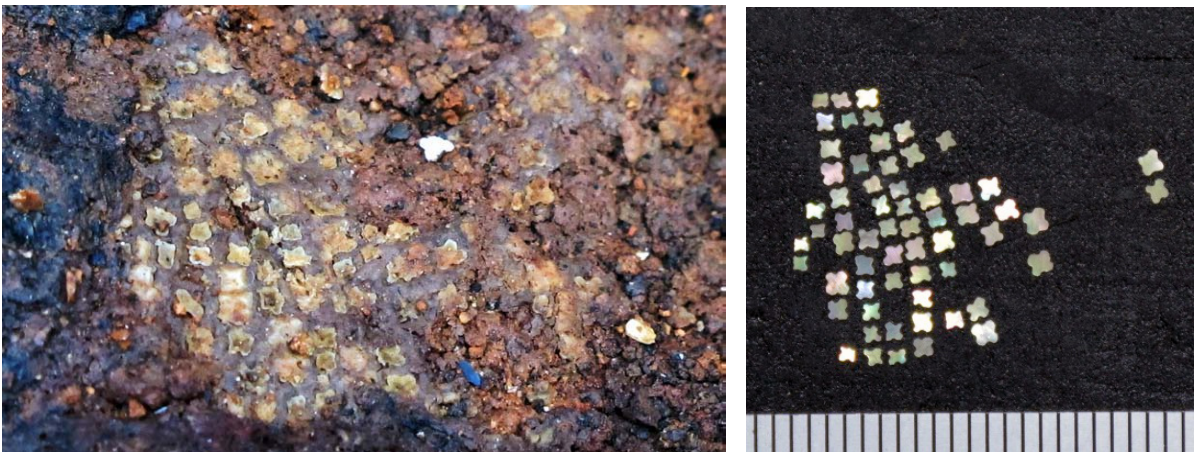


写真 5 88 号墳出土螺鈿（左） 再現写真（右）

IV. おわりに

大成洞 88 号墳から出土した螺鈿のような形状をした遺物は、現在発掘が完了した状態であり、実物の確認が不可能であり、遺物の材質を特定することは現時点では不可能である。しかし、万一出土遺物が螺鈿であるとすれば、精密な螺鈿加工技術は韓国の漆工芸技術史から考えると、螺鈿製作技術が 700 年以上遡るだけでなく、東アジアの螺鈿技術の歴史を考察することから見ても、画期的な成果であるに違いない。

そこで本報告書では 88 号墳から出土した遺物が螺鈿である場合、精密な加工が可能であったかを明らかにするため再現を試みた。その結果、写真に示したように加工することができた。このため 88 号墳出土遺物は螺鈿である可能性が高いと考えられる。

付記 本報告の機会を与えて下さいました大成洞古墳博物館の学芸士の方々に感謝申し上げます。

参考文献：

遼寧省博物館 2015 『北燕馮素弗墓』文物出版社。
中国漆器全集編集委員会 1990 『中国漆器全集』4 三国～元, 福建美術出版社。

原載：

이선주^{イソンジュ} 2015 「대성동 88 호분 출토 나전 유사 유물 복원 시도」『金海大成洞古墳群－85 号墳～91 号墳』(博物館学術叢書 15), 大成洞古墳博物館:198-200.

咸安末伊山古墳群 5 号石槨墓より

出土した象嵌大刀の木質と

漆塗膜の材質調査

岡田文男（京都芸術大学）

이선주^{イソンジュ} 李宜周（韓国伝統文化大学校）

I. はじめに

咸安末伊山^{マリサン}말이산 5 号墳より出土した象嵌大刀の把・鞘に遺存した木質ならびに漆塗膜について、試料採取による同定作業を行い、表面の漆塗膜について断面観察を行った。

II. 分析試料と方法

大刀に遺存した木質の樹種を調べるため、鉄刀の把ならびに鞘に銹着して遺存した木質から数ミリ角の試料を採取し、それをさらに分割して木口、柾目、板目の 3 断面をエポキシ樹脂（主剤：アデカレジン EP4200、硬化剤：アデカハードナー 4332、配合比 5：2）に包埋した。それらの断面を研磨してスライドガラスに上述の包埋用樹脂で接着し、厚さ約 20 μm まで研磨して、光学顕微鏡 (Nikon

OPTIPHOT2-POL) により観察した（撮影：Nikon NIS-ElementsD）。木質表面に漆が塗布されたものと表面の漆塗膜についても同様に観察を行った。なお、採取試料は担当調査員によって行われたものであり、試料の制約によって 3 断面の観察が不十分なものもあったことをお断りしておく。

(1) 5 号墳象嵌大刀の木質

① 把元 (写真 1~5) 写真 1 は 5 号墳象嵌刀の鞘口付近の試料採取箇所を示したもので、左側が把元に当たる。写真 2 は把元の木質の木口面を観察した結果であり、画面下方に広葉樹材の木口面が、上方に漆塗膜面がみえる。写真 3 はその拡大であるが、断面には接線径 100 μm 以下の道管の多くが独立して比較的均一に分布する。画面の上下方向には放射組織が約 5 細胞幅で等間隔に分布する。写真 4 は柾目面を示したもので、上下方向に 2 本の道管がみえており、端部が単穿孔からなる。水平方向に 3 つの放射組織の断面が見え、平伏細胞のみで構成されており、同性であることを示す。写真 5 は板目面を示したもので、紡錘形の放射組織が均一に分布する。中には細胞高が 100 近い放射組織もみえる。以上の観察結果より、把元の木質はムクロジ科カエデ属 (*Acer. sp.*) の特徴を示す。

② 鞘 (写真 6~10) 写真 6 は 5 号墳象嵌刀の鞘